

奥那須	男鹿山塊	No.101
-----	------	--------

かなり前から考えていた冬の男鹿山塊。この山に関する限り、情報が乏しくポピュラーではないことと山としての雄大なイメージから遠く感じるせいであろうか、「よし、一緒にやろう」と言う奴が一人も現れない。そんなこともあって単独行を覚悟の上での計画だった。

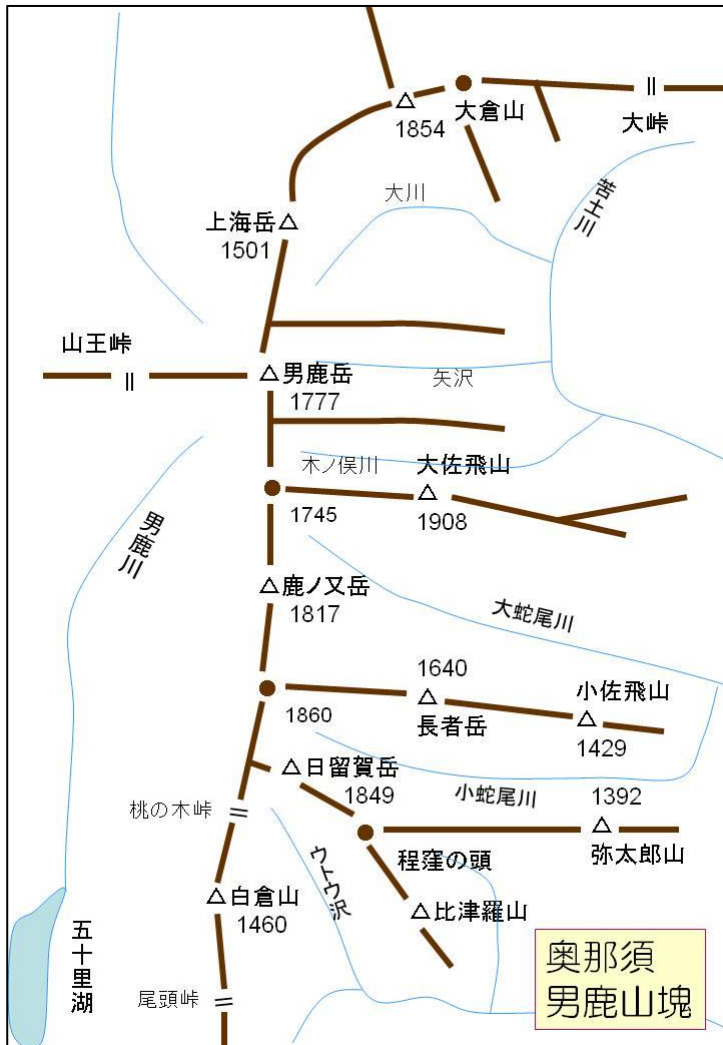
暮の25日頃から準備を開始し、大晦日の朝出発の予定で「特急 第一さち」の切符も購入した。ところが、出発の前夜(12月30日)何となく喉が痛く、当日の朝になっても痛みがとれない。単独行の冬山でしかも偏狭の山のため、大事を取り大晦日の出発は見合わせ、終日布団の中かで過ごすことにした。おかげで、特急券はふいになってしまったが、大晦日をのんびり過ごすという何年ぶりの椿事となった。

昭和43年1月1日

元日の朝、ゆっくり家を出て浅草へ。10時40分の急行ゆにしの指定席をとり、恩田に電話をしたのち浅草寺付近を散歩。元日にもかかわらず(元日だから?) 電車は満員、ほとんどが帰省客のようだ。下今市から見る日光の山々は四分程度の積雪。鬼怒川温泉着12時49分。

バスターミナルは混雑しており、特に私が乗ろうとしている会津田島行は待ち行列が一番長い。東北本線、磐越西線経由で行くより鬼怒川経由でバスで行った方が早く楽に行けるということらしい。バスを待つ客はほとんどが会津言葉で、私だけがよそ者という雰囲気。山王峠の下の横川まで乗車券を購入(290円)。長い行列の末、12時55分の臨時バスにありつくことができた。

川治を過ぎて五十里湖の海尻橋を渡ると、会津西街道と言う名の響きそのままに男鹿川は川幅が狭くなり、山また山に囲まれた狭い凸凹の道になってくる。網棚の荷物が落ちてきたり、隣の人と鉢合わせをした



り、山また山に囲まれた狭い凸凹の道になってくる。網棚の荷物が落ちてきたり、隣の人と鉢合わせをした

り、久しぶりに故郷に帰る若者や家族そろって田舎で正月を迎える人たちで車内はなごやかそのもの。二三人で話す東京言葉の輪がいつの間にか五六人に広がり、しかもバスが山奥深く入って行くにつれて話し言葉も会津言葉になっていく。「私だけが一人ぼっち」のような感じになってくる。

横川14時15分着。下車したのは私のほかに土地の者らしい二人連れ。

バスはここでチェーンを付けて山王峠への登りに入る準備。

左へ大きくカーブして峠へのジグザグの道に入るバスを見送り、右手の男鹿林道の標識に従う。国道を離れるにつれて雪は多くなり、営林署前の辺りからは30cm~50cmの深さ。林道には森林監視人のものと思われる長靴の足跡が心細げに一つついているだけ。

約70分で男鹿倉沢にかかる男鹿倉橋。ここで足跡は消えてしまった。ここから先は、コンスタントに30cm~50cmの積雪。オーバー

踏み跡 < My mountains >

シューズをつけるのも面倒くさいし、時間も時間なので今日はここでストップということにし、橋の袂の雪を整地して幕営。ココアを飲んで一息ついたあと、16時15分から夕食の支度。ここをベースキャンプとして、明日からこの奥を探って見ることにする。稜線へ出られればうれしいが、それは成り行き任せ。元日の夕食はお雑煮。星の光の下、19時就寝。



昭和43年1月2日 天気 晴 <ベースキャンプ←→白滝沢>
起床 4時、朝食は餅入りラーメン。多少雪がちなのが気がかりではあるが、星も出ていることだし……。
6時 15分出発。雪はいくらか硬くなり30cmほどのラッセル。20分ほど登ったところで本流沿いの道を右に分け、白滝沢林道に入る。林道に入るとまったくの処女雪で、時には膝を没するどころか大腿部ぐらいまでの深みに落ちることすらある。

<右写真:男鹿林道>

ベースキャンプから約三時間、9時に林道終点に到着。地図上の1200m地点と思われる。物置のようなボロ小屋が一軒建っているだけの殺風景なところで、これより奥は藪がちの狭い谷になる。しかし展望が良く、沢の奥に主稜線(鹿ノ又岳付近)を望むことができる。西方に目をやれば、国境の上に荒海山の雄大な稜線が、コーカサスの山々のような迫力で立ち、会津の冬の大きさをビリビリと感じる。ガイドブック上で語られている三ノ平への登路を探してみたが切り開きも見当たらず、見たところからの印象では稜線を狙うには沢から詰めて行くほうが得策のように感じられる。
10時になってようやく鹿ノ又岳の頂上から日が出てきた。太陽は男鹿の山脈から上がり会津方面に沈む。地図上で見てもわかるように、日照時間は非常に短く、日の光を浴びぬ谷が殆どのである。そのため、雪が融けることはなく、夜が如何に寒くても雪面の凍結はないのでいつでも柔らかな雪のまま。そんな事実を考慮すると、この山に挑むにはスキー使用という方法が適切なものかもしれない。
帰りは、途中でゴイワイの滝を眺めながら二度目の昼食。この滝は広いゴーロの多いこの沢で今日見た唯一の滝らしい滝。しかし形は良いが小さめで迫りに乏しい。
13時35分天幕帰着、16時15分夕食。食事の後でキジ撃ちに出かけて見たら今夜も星空。どうやら天気は持ちそうだ。明日は男鹿川本谷へ行ってみることにする。
18時シュラフィン。今夜は何となく話し相手が欲しいような気分の晩だ。なぜか知らぬが誰かと話でもしながら眠りたいような気がする。ひとりぼっちが寂しくては「山」なんか駄目だぞ!!
腹が減って目が覚めたので時計を見たら23時。寒いので夕食の残りのスープを温めて飲んだら暖かくなり、また眠りに戻った。

昭和43年1月3日 天気 晴のち曇りのち雪 <ベースキャンプ←→男鹿川本谷>

起床5時、一時間寝坊してしまった。夜中にスープを飲んで熟睡しすぎた。
オーバースボンもはいて、6時40分出発。

白滝沢林道を右に分けて、本谷沿いの林道へ。林道の積雪は昨日同様 30cmほどのラッセル。
一時間半ほどで林道終点に到達、8時30分。ここから沢には行って歩くことになる。夏道の踏み跡らしくくぼみの付いた沢の雪の中、平凡な河原歩きが続きしかも沢幅も広いので谷は明るく、沢歩きの感じがしない。しかし、奥に入って行くにつれて積雪量も50cmを越えるようになり、徒渉やゴーロなどではかなり気を遣う。広い河原がしばらく続きその単調さに退屈していると、小さいながらスラブ滑滝の連続。しかも沢幅も狭く暗くなってきた。滑床の沢は、滝のないところでも水をきれいに見せてくれる。冬ながら水は緑色。しかも

踏み跡 < My mountains >

沢の両端や所々の水の中には白い雪。ここらが本谷の核心部と見る。

やがて茅葺きの掘立て小屋。ガイドブックに「ビバークに最適」と書かれている所。ここからは沢は狭くなり、さらに一時間ほど登れば小尾根に取り付くことができるはず。男鹿岳頂上を手中にできそうなところまでたどり着いたが、時刻は既に 10時 30分。食事をしてさらに上流へ足を運ぶ。

遅い谷間の日の出は 11時、ようやく太陽の姿を見ることができた。だが、雪は陽光を浴びて融け始め、輝きを増して足にまとわりついて歩きにくいことこの上なし。

11時15分、時間的な判断からこの地点で折り返すことに決定。今回の山行は登頂よりも偵察に重きを置いた山行なので、山頂に立つことには拘らない。折り返し後は自分が付けたトレイルだから歩きやすい。

13時、途中の河原の流れの畔でしばしトカゲを楽しむ。一人旅は気ままなものだ。会津との国境の稜線に黒雲が立ちこめ小雪が風に舞い始めるまで、ゆったりと。

奥那須の山は会津側の空模様を注意深く見ていれば天気の前測がつく。

明日から天気は下り坂だろう。

記号尾根の突端あたりから、昨年四月念願叶い登頂成功した日留賀岳がわずかに顔を見せている。



<上写真:男鹿川本谷>

天幕帰着15時。夕食までの時間を利用して、二日間の成果を省みる。今日の折り返し点は海拔1200m地点、夏ならば鬼怒川を朝出発した場合のビバーク地点になると思われる地点で、男鹿岳登頂の場合のベースになる所である。沢もあのあたりの滑滝を過ぎるとゴーフに入り、ツメに入るはず。本谷の核心部を通過しての感触として、このコースなら男鹿岳アタックは難しくなさそうだと感じた。また、昨日は行った白滝沢ルートは、登山ルートとして使うより下山ルートとして使う方が便利だろう。

16時15分から炊事開始、17時15分夕食終了。キジガミも残り少ないので、衛生上の観点からも明日下山が妥当だろう。多分明日から天気も崩れることだろうし。18時シュラフィン、雪が降り出した。

昭和43年1月4日 天気 雪のち晴 <ベースキャンプ→下山>

腹が減って目が覚めたら3時35分。雪はまだ降り続いており、夕べからの積雪は15cm。軽く食事をとり、まだ早すぎるのでまた一眠り。

6時30分本当の起床。ゴミを焼き、パッキング。7時30分出発。

三晩の宿となった男鹿倉橋を後に元日に登ってきた道をまた横川へ。

(左写真:さらば男鹿倉橋 BC)

静かに静かに降り続く雪を体に受けながら林道を下って行く。

横川着は9時ちょうど。次のバスは10時40分発なので暇つぶしに駄菓子屋に入ってみた。店の奥のこたつで老婆が、

「まだ時間がある、お茶でも飲んでいきな」

老婆が差し出す梅干をつまみお茶を飲みながら世間話。もっぱら聞き役になって、山の話、旅の話、都会の話、雪のこと、村のこと……。夢中になっているうちに、深々と降り続く雪の中を10時40分のバスは行ってしまった。次のバスはまた三時間待たねばならない。今さら何をあわてることであろうか。老婆の話でいくらか彩られた谷間の集落を次のバスが来るまで歩いてみることにした。

上三依を過ぎると雪は止み、青空さえ見えるようになってきた。農家

の家並み、川の流れ、路傍の墓石、そのつもりで見れば田園風景はまったく目を飽きさせない。



踏み跡 < My mountains >

12時、大面(おおづら)という集落で昼食をとり、13時36分のバスに乗った。バスは、山に入る日にそうであったように超満員。正月だし、たまには贅沢でも…と思い、帰路は15時50分発の特急ロマンスカー。この山行で男鹿山塊、会津那須国境稜線についてかなりのことが掴めた。これを手がかりにして、いずれはこれらの山々を自分の物にしたいものだ。

以上

男鹿山塊に関する雑情報

●男鹿山塊という呼び名

この山行を実行した頃には、男鹿岳(1717m)は「おおがだけ」「おがだけ」「おじかだけ」など、いくつかの読み方がされていた。50年余り経過して、2023年の各種資料を覗いて見ると「おじかだけ」となっており、このあたり一帯を「男鹿(おじか)高原」とする観光資料もあった。

この山行でベースキャンプとした男鹿倉沢は、当時は「おがくらさわ」とふりがなが付いている資料が多かったが、2023年の国土地理院地形図では「尾ヶ倉沢」となっている。これをもって正しい情報とするならば、「男鹿」の読みは「おじか」ではなく「おが」が正しいのではないかとも思える。

●男鹿山塊の主要なピーク

男鹿岳(1717.1m):前記の通り

鹿又岳(1817.1m):当時の資料では「鹿ノ又岳」となっていた。読みは「かのまただけ」。

瓢箪峠(1696m):男鹿岳と鹿ノ又岳の中間点付近にある。当時の地形図には存在しなかった名前
で、2023年の国土地理院地形図によると稜線上に「池」の表記がある。

瓢箪のようにくびれた稜線の形状から付いた名前と思う。

日留賀岳(1848.9m):「ひるがたけ」という名の由来は「蛭(山ひる)」ではないかと思う。

●会津鉄道(野岩鉄道)

首都圏と会津を結ぶ交通機関が少なく、古くから鬼怒川温泉と会津田島を結ぶ国鉄野岩線の開通が切望されていた。この山行の時代には「会津田島・三依間の部分開通が昭和45年」とされて、工事が少しずつ進んでいた。開通したのは1986年で、全線全通し東武鬼怒川線からJR会津田島ままでの電化と乗入れが実現したのは1990年。この間に国鉄分割民営化なども絡み、実現形態としては、第三セクターによる会津高原鉄道という形になった。

元を辿れば、大正11年(1922年)に敷設予定路線として掲げられたのが始まりという長い歴史の産物で、全線開通した時期には、もう中山間地域の過疎化が進み始めていたという皮肉な結果になった。本山行を含めて何度かこの山域に入ったが、その都度接した地元の方から「野岩線早期開通を望む」声を数多くお聞きした記憶がある。

(修正・更新:2023年12月)